

スポーツジャーナリスト

二宮清純さん

スポーツジャーナリストとして、さまざまなメディアでご活躍中の二宮清純さん。ご自身が立ち上げられたウェブマガジンでは、独自の視点から幅広いジャンルのスポーツ情報を発信されています。多くのスポーツ選手の話に耳を傾け、数々の名勝負を現場で取材されてきた二宮清純さんに、スポーツを通して見えてくるものについて伺いました。

勝負を分ける準備力
— 想定外にどれだけ備えられるか





PROFILE

【にのみや せいじゅん】スポーツジャーナリスト・株式会社スポーツコミュニケーションズ代表取締役。1960年、愛媛県生まれ。スポーツ紙や流通紙の記者を経てフリーのスポーツジャーナリストとして独立。オリンピック、サッカーW杯、メジャーリーグ、ボクシング世界戦など国内外で幅広い取材活動を展開中。東北楽天ゴールデンイーグルス経営評議委員。日本サッカーミュージアムアドバイザーボード委員。テレビのスポーツニュースや報道番組のコメンテーター、講演活動と幅広く活動中。「プロ野球の一流たち」（講談社現代新書）、「勝者の思考法」（PHP新書）、「ワールドカップを読む」（KKベストセラーズ）、「野村克也 知略と戦略」（PHP研究所）、「変わらない組織は亡びる」（河野太郎議員との共著・祥伝社新書）など著書多数。近著に「天才たちのプロ野球」（講談社）、「プロ野球の職人たち」（光文社新書）がある。

[HP] <http://www.ninomiyasports.com/sc/>
携帯サイト [二宮清純.com] <http://ninomiyaseijun.com>

——はじめに、二宮さんご自身について伺いたいと思います。現在、スポーツジャーナリストとして、執筆活動や講演活動、テレビ等で幅広くご活躍されていますが、スポーツ分野に幅広くご関心を持たれたのはいつ頃からでしょうか。

子どもの頃、愛媛県で育ちましたが、当時は民放局も1局しか映りませんでした。今と違い、テレビで見る番組も野球や相撲やボクシングなどで、子どもの遊びも相撲をとったり、草野球ぐらいいですから、必然的にスポーツに興味を持ったと、そういう時代だったですね。

——スポーツに関心があつたということで、まずはスポーツのメディアを目指されたとい

うことですか。

特に目指したというわけではありません。これも子どもの頃に原点があると思います。「基本的には嫌いなことはやりたがらないのが人間ではないか」と思っています。私はやはりスポーツが好きだったので、最終的にスポーツに関連する仕事についてたのではと、今考えたらそう思います。

——スポーツ紙や流通紙で記者としての経験を積まれた後、スポーツジャーナリストとして独立し、起業もされていますが、生涯の仕事とするには、それなりの自信やご決断があつたのではないかと考えますが、会社を起すきっかけについては、2つ挙げられます。

1つは、やはりITの普及が大きいです。SPORTS COMMUNICATIONS（スポーツコミュニケーションズ）というサイトをつくり、今年で12年になります。インターネットが普及し始めた時に、これは新しい媒体だと思いました。インターネットがあれば全国どこにいても、あるいは世界中どこにいても、見ることができるようですから。

これも原点としては、子どもの頃の経験にあります。当時は朝刊が来ても、プロ野球の結果が全部は載っていないかったです。

「やる以上は、それを追求しなければいけない」、そう思います。

これは試合時間が長引いたりすると印刷時間に間に合わなくなるからです。輸送の間もなくなくなる。その日の結果がどうか分からない、そういうタイムラグがある時代でした。

その点、インターネットがあればタイムラグは全く発生しません。色々な情報をタイムリーに発信できるということは、とても魅力的に感じました。

——それで会社を起されたのですか。

これは1人ではできないものですから、会社をつくって発信してということ。

1つは、そういう私の少年時代の原体験があつたということですね。

——では、もう1つとは？

もう1つは、地域に貢献ができるのではないかとことです。当サイトには「FORZA SHIKOKU」というコーナーをつくっています。これは、私が四国出身ということもあり、四国の選手の情報を多めに扱っていろいろと始めました。どこにいても、四国の選手の情報をタイムリーに知ることができます。このような形で地域貢献が多少できるのではないかと思つたのがきっかけでした。

しかし、そうはいつても赤字が続いたりすると、事業は継続できません。理念だけで

サムライの原点は野茂英雄さんの 挑戦にあるのではないかと思えます。

は継続できないのです。ですから、資金の手当てが必要ということで、スポンサーの方に協力してもらっています。

また、やる以上は継続しなければいけない。

「継続は力なり」という言葉がありますが、「始めました、はい、やめました」「また、全く新しいこと始めました」というのでは、継続性も一貫性ありません。「やる以上は、続けなければいけない」、それが私の考え方です。ですから、継続するためには、ある程度の資金的な料金設定も必要ということ、今の形態をつくり、1日も休まずにやっています。

お陰さまで、読者の方に徐々に認知され、支持されているのかなと思います。

—— スポーツジャーナリストという職業に足を踏み込まれる時に、不安や自信など色々あったのではないかと思えます。スポーツジャーナリストとしてやっていこう、やっていけるのではないかと考えられたプロセスと
いうのは。

そんなに不安はなかったです。これは人の価値観にもよると思いますが、「基本的に人間は好きなことを続けたい」と思うのです。自分のやりたいことであれば、徹夜をして取り組んだとしてもあまりストレスもた

まりません。私の場合、スポーツは好きですし、ものを書くことも好きです。それに、人と会って話を聞くことも好きですから、苦にならないのです。

逆に仕事を離れると、今日何しようかなと思つて（笑）、逆に不安になるというか。

—— 今までにインタビューや対談をされた方は、色々な分野でご活躍されている方々だと思えます。特に、生き方や考え方がすごいなど二宮さんご自身が感銘を受けた方や印象の深い方を教えてください。

何人かいますが、選手であれば野茂英雄さんです。彼が四面楚歌の中でアメリカへ行ったのは1995年です。彼がメジャーリーグへの扉を開いた事実的な、バイオニアと言つていいでしょう。彼とは社会人時代から懇意にしていたので、この挑戦を応援したいと思いました。また、私自身も、日本人がどれだけメジャーリーグで通用するか見てみたいという思いもありました。

—— 二宮さんがメジャーリーグに関心を持



たれたきっかけとは。

これも子どもの頃の原体験だと思います。小学生の頃にメジャーリーグのカーディナルスが来日したのです。その時の少年雑誌に、巨人とカーディナルスの比較が掲載されました。例えば、1番の柴田とブロックの足はどっちが速いかとか、長嶋とセペダはどっちが勝負強いかなど比較がされていました。日米対決のようなものです。小学生ですから、メジャーリーグのことは詳しく知りません。当然巨人が強いだろう、というような程度です。

ところが試合をしてみると全然違う。初めてのカルチャーショックでした。「えっ、海の向こうの野球ってこんなにすごいんだ」と。このカーディナルス体験というのが、私がメジャーリーグに興味を持ったきっかけです。



「天才たちのプロ野球」(講談社)

長年プロ野球を取材してきた筆者が、各回1人の一流プロ野球選手に直接取材を行い、天才たちの内面に迫る「週刊現代」の人気連載企画『二宮清純レポート』の初の書籍化です。



「プロ野球の職人たち」(光文社新書)

あらゆるポジションの選手から、華やかな舞台を陰で支える“裏方”まで、球界の職人たちのワザの秘密に、スポーツジャーナリストの二宮清純が迫る！

そのような海の向こうの憧れの世界に、「野茂英雄」という社会人時代から取材してきた選手が挑戦するとなると、これはやはり応援しないわけにはいかない。

——当時の野茂選手への世間の反応は。

ところが、当時の日本の球界は非常に閉鎖的で、裏切り者などと言う人もいました。私は、「彼のやっていることは正しい」「これが本場のサムライだ」ということで、ずっと彼の記事を書きました。

彼から教わったのは、「勇気」と「不言実行」です。今でこそ、日本代表を「侍ジャパン」とか、よく「サムライ」という言葉を使う

ようになりましたが、個人的には、サムライの原点は野茂英雄の挑戦にあるのではないかと思います。

——では、もうおひと方は？

もう1人挙げるならば、Jリーグの生みの親とも言える、川淵三郎さんです。

私自身、地域密着型のスポーツクラブというものをメジャーリーグやヨーロッパのサッカー等で取材してましたので、「スポーツというのは地域が原点なのだ」と思います。考えてみると、ヨーロッパのサッカーでは、メジャーリーグであれ、チーム名には都市名が残っています。レアル・マドリード、FCバルセロナ、インテル・ミラノ、野球では、ニューヨーク・ヤンキース、ボストン・レッドソックス等。それはすなわち都市の文化です。

——考えてみればそうですね。

一方、日本の場合、スポーツが学校教育の一環として、また企業の宣伝活動として行われてきました。それはそれで良い点もありましたが、景気に左右されるなど弊害も生まれました。

川淵三郎さんは、「地域を中心に行っているのだ」と、まさに「スポーツは地域の財産だ」

という、地域密着型の理念を持ってJリーグをつくりました。その時に色々意見交換させていただきましたが、川淵三郎さんのアニマルスピリットというのでしょうか。ああいうリーダーシップを発揮する人がいなければ、Jリーグは誕生していなかったですし、今のような日本のサッカーの発展もなかったと思います。

——川淵さんは、地域密着型の理念を持ってJリーグをつくられたことですが、「地域密着型のスポーツ」という点で、二宮さんのお考えと共通するところはありますか。

「地域密着」、これをやらないと日本のスポーツは発展しないということです。言うなれば、日本の国のかたちでしょう。中央集権から地方分権という、国のパラダイムを変えようという動きの中で、スポーツが変われば地域が変わると、地域が変われば中央も変わっていくと、そういう思いはありました。この国のかたちを変える、これは1つの突破口になり得るのではないかと思います。

人もモノも金も、何でも中央に集まるということ、これは「歪なカタチ」ではないでしょうか。私は、もう少し地方が主役になる時代が来なければいけないと思っています。

「地域密着」、これをやらないと日本のスポーツは発展しないということです。

準備というのは、「想定外のことまでちゃんと想定範囲に入れておく、その解決策をちゃんと用意しておく」ということです。

スポーツ選手が典型ですが、出身が地方でも東京の学校や企業で活躍するというのが多いですが、それが果たしていいのでしょうか。

私は「スポーツの地産地消」を唱えています。もし、地元で生まれた選手が地元クラブでプレーできるとしたら、当然地元への支持も得られるわけです。これが本当の豊かな社会ではないかと、欧米のスポーツ取材していてずっと思っていました。川淵三郎さんというリーダーの出現は、日本のサッカーにとって、「最後の改革のチャンス」だったと思います。

——川淵さんの改革によって、**地域密着型**のJリーグが生まれたのですね。

また、この地域密着という理念が他のスポーツにも波及していきました。

例えば、野球では、北海道日本ハムファイターズが、最初は「北海道のような寒いところで野球なんかできるか」「巨人ファンばかりで日本ハムファンなんかいない」という批判をする人もいましたが、今では立派に根付いています。

東北楽天ゴールデンイーグルスだってそう



です。やはり、地域密着の正しさというのは、その後のプロ野球にも影響を与えたと考えられます。

——二宮さんの著書、『勝者の思考法』において、「勝負を分ける準備力」というお話がありました。準備力とは、勝敗を左右する鍵になるものと書かれています。仕事を遂行する上でも置き換えられるもので

しょうか。

準備ができていないと結果が出ないということ。スポーツは白黒がはっきり着きますので、どこに勝因があったか、どこに敗因があったのかは調べれば明らかになります。その辺りはビジネスにおいても共通する点ではないかと思えます。

過去の名勝負の裏側を調べたら、やはり準備ができています。準備というのは、「想定外のことまでちゃんと想定範囲に入れておく、その解決策をちゃんと用意しておく」ということです。

「転ばぬ先の杖」という言葉がありますね。これは本当にいい言葉で、転んでから杖を探しても遅いのです。転ばぬ先の杖を何本用意できるか、これが勝敗を隔てる因子の正体だろうと思います。

スポーツは何が起きるか分かりません。誰かがをするかもしれませんが、あるいはこんなはずじゃなかったというようなアクシデントも起きます。急に雨が降ったり、風が吹くこともあるでしょう。しかし、「こんなはずじゃなかった」で終わらせてしまつては、成長も勝利もないのです。

そこで、「このようなアクシデントもあるだろう」と想定範囲の中に入れて、徹底して準備をすれば、急な事態にも対応できるということ。です。

——なるほど、前もって用心していれば、転ばないということですね

勝つリーダーは、最悪の状況を想定しま



す。そして切るべき最善のカードを1枚握っている、それはためらわずに切ってみせます。これこそが、究極の危機管理だと思います。何か起きてからでは遅いのです。「想定外のこと起きてしまったから勝てませんでした」、これは言い訳です。

考えたくないですが、「残念ながら最悪の状況は起こり得る」。その場合にはこのカードを切らなければいけない、まさに転ばぬ先の杖を何本用意できるかということですが、それはすなわち、用意周到さ、準備力、これを徹底してやらなければ勝利は見えてきません。

——「準備力」についてのエピソードを、1つお願いします。

一例を挙げれば、北京五輪のソフトボールチームが金メダルを獲りました。斎藤春香さんという女性の監督だったのですが、北京

の本番では何が起こるか分からない、アクションへの対応力が必要であるという考えのもとに、万全な体制で挑むためあらゆる想定で準備されました。

例えば、もし、ナイターの照明がまぶしければ、外野手はボールが照明にかぶる可能性があると想定をし、照明を明るくしてサングラスを掛けて守る練習をしました。

実際の会場の照明は、昼間の太陽並に眩しかったのです。時間がなかったものですが、とりあえず1次リーグで実験しようということ、サングラスを掛けた選手と掛けない選手の違いを調べたところ、サングラスを掛けていなかったレフトの選手が1つミスをしました。

それで決勝トーナメントに入ってから以降は、全員にサングラスの着用を義務付けました。決勝トーナメントに入ってから日本ではエラーが1つもなかったのです。

——ナイターでサングラスを掛けて練習するというのは、すごい想定ですね。

あの時の優勝の立役者は上野由岐子というピッチャーです。しかし、上野を支えたのは日本の鉄壁の守りでした。日本の鉄壁の守りを支えたのは日本のそのサングラスの技術力だったわけです。要するに用意周到に

危機に備えたという準備力です。

やはり「転ばぬ先の杖」です。勝負の場面では本当に何が起こるか分からないので、そこまで見据えて先手を打って準備をしておくことです。

病気でさえです。治療よりも予防だと思えます。病気になる前に対応しておく、治療の前の予防が大事だということです。何でもそうではないでしょうか。

——ありがとうございます。今のエピソードから準備力は人生の計画、ライフプランにおいても共通するのではないかと思います。スポーツは何が起こるか分かりませんが、これは人生も同じです。確かに、最初から全て私の人生はこうですと見えるよりは、何が起こるか分からないから人生は楽しいところもあります。

ただ、「何かが起こってからでは遅い」ということです。そこで、やはり準備が必要ということになります。これは人生の計画と一緒に、ライフプランと重なります。丁寧に計画をしても100%はありません。まさかということはありません。

だが、緻密に計画をしていれば、想定外の幅が小さくて済むのです。またそこから対応ができます。しかし、全く計画がなければ、

**緻密に計画をしていれば、
想定外の幅が小さくて済むのです。**

日本人の平均寿命がどんどん伸びていますが、問題は、まさにクオリティ・オブ・ライフなのです。



まさかが起こった時点でゲームセットです。無策、無計画ほど恐ろしいものはありません。だから、何事もどこかで頭の片隅には最悪の事態を想定しておくべきでしょう。ただし、あまりそればかり考えると暗くなってしまうが（笑）。

——『勝者の思考法』の中に勝利への秘訣は、「作戦をたてるまでは最悪の事態を想定し悲観的に計画し、いざ実行する時は思い切って楽観的に取り組むこと」とありましたが。これは稲盛和夫さんのお話を例にとつてい

ます。著書の中に「楽観的に構想をし、悲観的に計画をし、楽観的に実行する」（稲盛和夫著『働き方』）という一文がありましたが、スポーツも同じです。やはり人間夢・目標がないと生きていけませんから、世界一になりたい、日本一になりたい、この分野でトップになりたいなど、夢・目標が必要だと思うのです。これは楽観的な構想です。

しかし、準備の段階では、悲観的な計画が必要です。計画というのは最悪の事態まで想定するということです。そして、いざ腹を決めたら、踏ん切りを付けて行動に移す。楽観的に実行する。この考え方は、全く私も同感なのです。

これまでのスポーツ選手の成功例を見ても、やはり同じです。これは何の世界でも言えることではないのかと、本当に思います。——「生きがいづくり」「コミュニティづくり」に関して、スポーツを通してできることがあると思うのですが。その点に関しては、いかがでしょうか。

高齢化社会においては、スポーツのソフトパワーとしての価値というものが、もっと高まっていくのではないかと思います。スポーツの持つ価値には幾つかあります。まず1つ目は健康の増進でしょう。

日本人の平均寿命がどんどん伸びていますが、問題は、まさにクオリティ・オブ・ライフなのです。長生きしたからイコール幸せではない。やはり健康でいられる時間がどれだけ長いかということ、これが大事だと思います。

そのためにスポーツというのはクオリティ・オブ・ライフに最も貢献できると言えます。ひいてはそれが医療費の削減などにもつながるわけですから、まさに健康でいるということが、自分にとつても幸せなことだし、そして国にも貢献できるということです。今後、健康の価値はさらに高まるでしょう。

——本日にそう思います。当協会ではセミナーにおいて「生きがいづくり」には「健康なからだ」が必要だと言っていますので。

2つ目に、ネットワークです。昨年の震災以降、「絆」という言葉が目立ちますが、それは「絆」がこの社会からなくなっているからこそ、強調されているのではないのでしょうか。スポーツクラブでは、色々な職種の人が集まってきます。色々な年齢の人、職種の人が集まってきますから、幅の広い人的ネットワークができます。その人的ネットワークを通して、より自分を高めることができます。あるいはより生活を豊かにすることができると。そういうスポーツの力を利用しない手はありません。

そして、3つ目は、家族のつながりです。フランスには親子3世代がプレーするクラブがあります。以前、取材で訪れた時に子ど

日本は学校と企業を中心に スポーツをやってきましたが、 これからは地域主導で

もとおじいちゃんとお父さん、3世代が一緒になってプレーしているラグビーの試合を見たのですが、これはいい光景だなと思いました。1つのボールを追って、親子3世代がつながっているんですね。

——例えば、地方公共団体も参加して地域スポーツの活性化に成功した例があれば、教えてください。

全国各地で総合型クラブというものがありますが、新潟は、近年、総合型で地域密着のスポーツが成功した例でしょう（ヨーロッパの総合型とは異なります）。アルビレックス新潟というサッカークラブがあります。そして、アルビレックスという名の下で、野球、バスケットボール、スキー、スノーボードなどのスポーツもやっています。

それまでの新潟というのは、割とスポーツに馴染みがなかったのではないかと思います。けれども、アルビレックス新潟ができたことによつて、地域密着のいろんなスポーツにチャレンジしています。まさに地域が主体になるうというところで取り組み、スポーツによつて地域が活性化した例と言えるでしょう。

——当然これは地方公共団体の職員の方もサポートされているのですか。

そうです。だから、スポーツクラブというのは、言ってみれば御興^{みこし}なのです。御興はみんなが支えないといけない。日本は学校と企業を中心にスポーツをやってきましたが、本当はそうではないと。御興は公共財だから、学校も企業も行政も地域住民も

みんなで支えましょうと、こういうかたちです。スポーツこそは本場の意味での公共財で、そこに官とか民の区別があつてはいけないのです。まだまだ発展途上ですが、新潟はうまくいっている例ではないかなと思います。

——最後になりますが、今年ロンドンでオリンピックが開催されます。メダル候補選手や日本のメダル獲得予想に関して、一言お願いします。

JOC（日本オリンピック委員会）では金メダル数で世界5位以内を目指しています。5位以内というのは、そんなにたやすい目標ではありません。アメリカ、中国、ロシア、オーストラリア、ドイツ、ホスト国のイギリスなど強豪国の中に割って入るわけですから、ハードルは低くないでしょう。

けれども、クリアできるかできないかはともかく、楽観的な構想として目標は大きく持っているほうがいい。そういう点では、ベスト5というのは目標としては良いと思います。

では、どうすれば目標達成できるか。やはり準備力にかかっています。これからの何カ月間が本場の勝負になってきます。本当に良い準備ができた選手、できたチームが良い結果を得られるということです。

選手には「もう時間がない」ではなく「まだ、これだけある」という攻めの姿勢で前向きに取り組んでもらいたいと思います。

——ありがとうございました。

（インタビュアー／協会職員 河本敦彦）

※このインタビューは4月12日に行ったものです。

